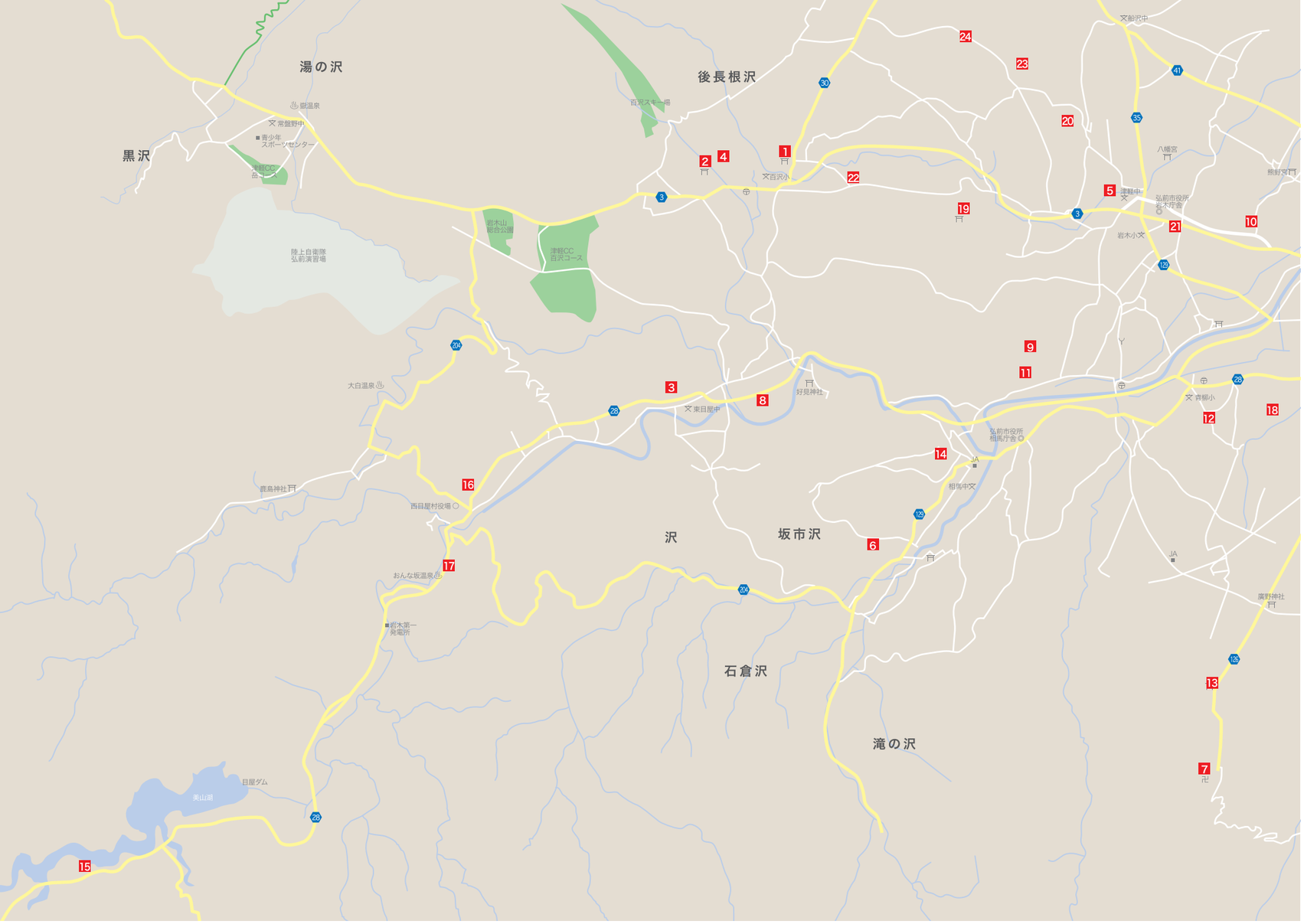

1 高照神社

高照神社は、四代藩主信政を祀る廟所に始まる。信政は宝永７年(1710)弘前で死去し、遺命により五代藩主信寿が吉川神道に基づいて高岡の地に神葬した。明治に至って同十年に初代藩主為信を合祀している。高照神社は、吉川神道に基づいた独特な社殿構成であり、全国的にほとんど類例がなく、近世神社建築の展開の一端を示すものとして価値が高い。

2 岩木山神社

【拝殿・楼門】 岳信仰に始まる古社で、この拝殿は元来、岩木山神社の別当寺・百沢寺(ひゃくたくじ)(神仏分離により廃寺)の大堂(本堂)として建てられたものである。天正17年(1589)の岩木山噴火によって百沢寺全山が焼失した後、藩祖為信が慶長8年(1603)に起工し、三代藩主信義の寛永17年(1640)に至って完成した。

楼門は百沢寺の山門として、二代藩主信枚の寛永５年(1628)に建てられた。百沢寺時代には上層に十一面観音、五百羅漢像を安置したが、廃寺に際して取り除かれ、階下に随神像を祀り現在に至っている。

【本殿・奥門・瑞垣・中門】

四代藩主信政の元禄７年(1694)に建立され、下居宮(おりいのみや)と称された。本殿・奥門・瑞垣とも下居宮の一環として同じ技法をもって建造されたことがわかる。中門も本殿・奥門と共通する豪華な意匠である。

3 多賀神社

多賀神社はもと清水観音堂ともいわれ、坂上田村麻呂の建立と伝えるが、慶長10年(1605)、２代藩主津軽信枚の創建と考えられる。神仏分離により、明治３年(1890)多賀神社となった。いっぽう、その後観音霊場の復活により、津軽三十三観音の第２番札所となった。

4 求聞寺

寛永６年(1629)、２代藩主津軽信枚が、虚空蔵菩薩を安置した、真言の秘法求聞持法を行う修験道場であった。明治８年(1875)年廃寺となったが、その後再興した。津軽三十三観音第３番札所、丑・寅年生まれの一代守本尊でもある。

5 大浦城跡

大浦城は、大浦光信が、文亀２年(1502)、種里(鰺ヶ沢町)から津軽平野へ進出するために築城したものであった。文禄３年(1594)、大浦(津軽)為信が堀越城に移るまで光信の子盛信、つづく政信・為則まで大浦氏の居城であった。長勝寺の庫裏は、この城にあったものである。

6 持寄城跡

鎌倉幕府の滅亡で津軽に逃れた幕府方の名越時如・安達高景らが、大光寺城の合戦に敗れ、石川城を経てこの城にたてこもった。北畠顕家の指揮のもとに多田貞綱・伊賀真光・南部師行らが攻撃し、激戦の末、名越・安達らは降伏または戦死した。

7 久渡寺

円智という僧が現在地の南西にある檜山(久渡寺山か)に一宇を建立したのに始まるという。その後道円・寛照によって小沢に移転され、慶長年間、寛海が現在地に移したという。寛永３年(1626)、最勝院・百沢寺・国上寺・橋雲寺とともに「津軽真言五山」に定められた。寺宝に伝丸山応挙筆幽霊の図があり、公開すると必ず雨が降ると信じられ、干天の雨乞いに効験が期待された。

【久渡寺のオシラ講の風習】 生産の神であるオシラ様は桑の木で作った男女一対の木像が御神体で、毎年の久渡寺の大祭には大勢の人が参拝に訪れる。以前は旧暦の４月であったが、現在は５月15・16日の両日で、前夜祭の15日から泊り込みで祭に参加する人もいる。

8 国吉板碑群

国吉板碑群は岩木川の西側、東目屋地区国吉の田の中に分散、埋没していた板碑を１ヵ所に集めたものである。12基のうち完全碑は６基である。また４基に、正和５年(1316)文保元年(1317)元応3年(1321)嘉暦４年(1329)の紀年銘が刻まれている。現在、「目谷郷(目屋郷)」の文書における初見は建武２年(1335)で、これらの板碑はそれより古い。

9 兼平天満宮の板碑群

鎌倉時代から南北朝期までの紀年銘を持つ４基を含む板碑群。これらの板碑群は貴重である。所在地名の兼平は通称「兼平石」の名の由来でもある。

10 熊嶋熊野宮の板碑

青森県内の板碑の遺存例は津軽地方に多く、まず、岩木川以西の旧鼻和郡に建碑の風習が起こった。この板碑は熊野宮参道脇に据えられているが、もとは近在にあった八幡宮の旧跡から移したものといわれる(『陸奥古碑集』)。

11 如来瀬神明宮の板碑

『陸奥古碑集』には、境内に２基(永和２年(1376)の碑、慶安７年の碑)のほか、境外道路南側に１基ある旨と記載されている。所在地名の如来瀬の由来は、この神明宮がもと阿弥陀如来を祀り如来堂と呼ばれたことによると伝えられる(『岩木町誌』)

12 青面金剛像庚申塔

庚申は、60日に一度巡ってくる庚申の日に、その夜を眠らずに過ごして健康・長寿を願う信仰である。これを守庚申または庚申待という。この石塔は、もと目屋街道沿いにあったものを昭和に常盤神社内に移した。弘前市内の民間信仰の石塔中最古の元禄15年(1702)の建立で、青面金剛像を刻している。

13 光明真言庚申塔

近世に入り講集団によって光明真言塔の造塔を各地でみたが、弘前市ではこの1基のみ確認されているだけである。本碑は、白蛇神社境内にあり、安永2年(1773)の紀年銘を有する。

14 上皇宮

勧請は大同２年(807)と伝え、もと宝龍権現であったが、明治初年改祀されて龍田神社となった。さらに昭和40年(1965)に上皇宮と改称され、祭神は第98代(南朝第３代)長慶天皇となる。天皇は南北朝時代に都の動乱を避けて潜幸されたという伝説が青森県内各地にあり、当地もその一つである。この伝説は地名の成立にも反映しており、五所(弘前市五所)は、天皇の御所があった場所といわれ、紙漉沢は天皇に供奉してきた高野山遍照光院の僧秀明が、紙の製法を村人に伝えたことにちなむという。

15 乳井貢の碑

昭和10年(1935)建立。7代藩主津軽信寧のときに、乳井貢は勘定奉行として、藩宝暦改革(1753〜58)を推進し、宝暦５年(1755)の大凶作を無事乗り切った。しかし、翌年の標符(藩札の一種)の発行と、貧富の調節をはかる貸借無差別令の公布でつまづき、領国経済が混乱して1758年退役させられた。安永７年(1788)再び勘定奉行に登用されたが、家老におさえられて、安永9〜天明4年(1780〜84)まで川原田村に蟄居を命ぜられた。その間に朱子学・老荘学・荻生徂徠や太宰春台の経済学、それに数学・農学・史学、さらに和歌・随筆などの著述を進め、村人たちの教化に努めて尊敬をうけた。

16 白神山地ビジターセンター

世界遺産「白神山地」の魅力をつぶさに紹介するとともに、自然との共生をテーマに考察・学習する施設です。センターには、臨場感あふれる大型映像で白神の自然を広く体験できる映像体験ホールなどのほか、自然遺産・自然保護活動などを紹介する展示ホールがあります。

17 乳穂ヶ滝

冬期は氷結して大小の二大氷柱ができる。その状態が乳穂に似ていることから乳穂ヶ滝と呼称されている。大きい方を粳乳穂、小さい方を糯乳穂という。古来旧正月17日には、弘前藩の使者が結氷のさまを描写して藩主に報告し、その年の豊凶を占う習わしがあったので、「世の中(稲作)の滝」とも呼んだ。また、近郷から参詣者が多数参集し、氷柱の大小や形状などからその年の豊凶を判断してきた。

氷柱の裏側を回って坂を上り、不動様を祀る壇上からの裏見もできる。寛政８年(1796)に菅江真澄がここに詣で、「豊年の徴も水もふる雪も千束に氷れ新穂のたきなみ」と詠み、目屋の名を広めた。

18 旧小山内家住宅

家伝によれば、小山内家初代権兵衛は寛永9年(1632)には西津軽郡広須村(つがる市)に知行地を持っていた。

この建物は、文久３年(1863)に小山内佐治兵衛によって建築され、数次の改修がされているが、構造上大きなものではなく、藩政時代末期の津軽地方の農家住宅としての形態をよく伝えている。現在は弘前市りんご公園内に復元されている。

19 羽黒神社

坂上田村麿呂の創立といわれる。坂上田村麿呂が蝦夷征伐で眼病を患った際、ここの清水で治したという伝説があり、以後この霊泉は禊水(体の邪気を清める水)、洗眼、飲水として利用されている。

20 橋雲寺

慶長６年(1601)、藩祖津軽為信が京都の愛宕山より浅瀬石(黒石市)勝軍地蔵を勧請し、８年後に２代藩主信枚が現在地に移し、４代藩主信政が社殿を修復して寺領100石を与えた。明治の神仏分離のとき別当院であった橋雲寺としたため、のちに村民が愛宕神社として再興した。辰・未年の一代本尊である。

21 伝一町田壱岐守信建公の板碑

津軽氏の祖光信の弟で一町田氏の祖である一町田壱岐守信建の古碑という伝承を持つが、歴史的には符号しない。一町田集落の由来を示す文化財でもある。

22 伝安東義季一族の板碑

この板碑は安東(安藤)義季一族の墓所から移されたと言われるものである。なお、『岩木村郷土史』では狼倉館を新法師に比定しているが、これには異説がある。

23 新岡田中家宅地内種子バンの板碑・新岡八幡宮の板碑

『岩木村郷土史』では、田中家宅地内の板碑は付近の新岡山高徳院の遺跡から移したとの伝承を紹介している。この板碑を八兵衛様と称すという。]

24 建武二年の板碑

伝承によると、建武年号を有する古碑にちなんで四代藩主信政が新岡八幡宮の地に廟所を営もうとしたが、それを嫌った村人が碑を隠したため、廟所は高岡に決まり、本板碑は、後年、新岡八幡宮鎮守の対岸の森で発見されたものという。

◇お山参詣(岩木山の登拝行事)

津軽一円から岩木山に向かい、御来迎を拝んで帰還する集団登拝行事で、「お山参詣」「ヤマカゲ」などと呼ばれる。古くは男性のみが登拝を許された。約10日前から精進潔斎に入り、御幣や幟などを仕上げ、また、出発までにお供え用の餅をつく。

この登拝行事は、村落内の古老を先達に集団登拝するという形でなされ、幼少期に初登拝するのをよしとされているほか、途中の種蒔苗代で豊凶の年占を行い、奥宮の堂の神前で大騒ぎし、下山にあたって五葉松の一枝を折って帰るなど、よく古風をとどめている。収穫感謝や生業の無事を祈り、家内安全を願う地域的特色ある信仰行事の一つとして重要である。

◆津軽神楽

津軽神楽は、堰神宮(藤崎町堰神社)の神主堰八豊後守安隆が、正徳2年(1712)から同4年まで、江戸・京都で神楽を研究修業し、帰藩後東照宮の山辺丹後と共に作り上げたものである。

はじめは、宝永7年(1710)に没した四代藩主信政を祀る高照神社に奉献されたが、現在は津軽一円の神職によって継承され、各神社の祭典で奉奏される。

江戸時代には舞の種類が20番ほどあったようであるが、明治以降に巫子舞や狂楽舞などが行なわれなくなり、今は宝剣、千歳など11番である。奏楽、舞踏とも優雅高尚で、神官が行なうところに特色がある